

最終報告書レポート

アジア圏のスラムに置ける、資本主義・グローバルゼーションの中での教育的思考についてのリサーチ／考察および舞台作品のクリエイション

1. 活動概要

まずは拠点国以外のフィリピン／マニラ、タイ／バンコク、メダン／インドネシアのスラムでの滞在、リサーチ、インタビューをもとに、彼らの生活の中での習慣、考え方、教育的思考を抽出し、作品のコンセプト・モチーフ・内容を深めた。そしてこのリサーチのもと、拠点国であるインドネシア／ジャカルタでのスラムでジャカルタでの改めてのリサーチ、インタビュー、共同生活、ワークショップを行なう中から相違点、共通点などを洗い出し、スラムそのものがもっている根源的な構造、問題を読み解きながら作品の本質を見出す。以上の現地での経験、思考のもと作品の制作をおこなった。最終的に、ジャカルタの芸術大学 IKJ にてワークショップとレクチャーパフォーマンスという形で作品の上演を行なった。



2, Yola Yulfianti とのリサーチおよびコラボレーション

Yola とのコラボレーションは、マニラ、バンコクでのリサーチの中でも違った視点から進められ、筆谷がオフィシャルに進めて行く中で Yola が自由に動くというバランスをつくり、お互い補完し合う形で進められて行った。しかし、ジャカルタに戻ってからクリエイションに取り組む上でその差は大きく広がった。スラムとの距離は彼女にとっては現実の世界の1部であり、私にとってはどこまでいっても他者としての距離を埋めることは出来ないことに気づく。



しかし、これは現在の日本人のリアリティであり、国際交流の本質の一端に身を以て気づけたという点が今回のリサーチの最も大きな収穫の1つであったと言える。相手にシンクロするのではなく、他者だから見えること、この立場だからこそ出来ることを自覚的に進めることは(そもそもの共同制作の中で無意識に行なっていたはずであったが)価値観の違いを認めることであり今後の世界への向き合い方としても非常に重要であると実感した。

3. フェローシップ活動記録

いままでのレポートでは“共通している点”を抽出するようなまとめ方をしていたが、この項目ではそれぞれの場所で違っている点を改めてまとめ直してみようと思う。

マニラ(フィリピン):今回訪れた中では最も貧困の大きな場所であった。4月におこったミンダナオでの事件を見てもわかるように、食べることもままならないというインフラが生活水準を象徴している。

それ故に人々は生き抜く為の知恵をそなえ、したたかであったが、そのエネルギーは日々の生活を生きぬくことに使われており、やはり長期的な思考の獲得は難しいように見えた。

地域によってはNGO慣れをしていて、支援されることに対する慣れも存在しており、支援する側との距離は大きく開いているようにも感じた。



バンコク(タイ):3カ国の中で最も近代化が進み、スラム問題が“過去”になりつつある場所であった。アーティストにこの問題への興味を聞いても、スラムへのアプローチは少し時代遅れである、というような回答を得る。

仏教国であることから、寺が無償でスラムに対して支援している点では、宗教とマニピュレーションとの繋がりは最も薄く感じた。スラムでの生活は、学校期間への就業率も高く、3カ国では最も水準高く見えたが、ただし、政府にとってオーガナイズされたスラムの状況、軍事政権の政府に対する懐疑心など、市民の意識の差によって見えてくもののギャップは1番大きいのではないかなと思う。

メダン(インドネシア):地方都市であり、肥沃な大地に恵まれていることと、中国系企業との繋がりからビジネスチャンスもあることから、のんびりとした余裕とひとなつこさを感じた。

ほとんど誰からの紹介のないまま訪れた私を、温かく迎え入れてくれたこの場所は犯罪率の高さが指摘される街でありながら、今回の滞在で最も安定しているように思えた。



ジャカルタ(インドネシア):3カ国の中で、最も目に見えた貧富の差が大きな都市であった。国土の広さ、人口の多さからも首都一極型の人口流入も激しく、ジャカルタに出てきたものの満足な仕事もなく、しかし帰ることも出来ない人々の多さを感じた。ただ、マニラとの大きな違いはやはり肥沃な大地を持つことから、飢えに対する危機感を持つ必要は少ない点であろう。能動的に動くことに慣れていないようにも見え、集団でうごきたがる人間の多さからも、個人で思考するという習慣は少ないように感じた。

4、グローバル化と資本主義

中間報告でも記していたが、今回のリサーチは”スラムにおける母親の教育的思考”をスタート地点として進めていったのだが、リサーチを進めるにつれて、彼女たちの”将来を見据えず今を乗り切る教育方針”、“教育を受けない親から子への悪循環”、“環境や状況に対して受け身（でいざるをえない）の姿勢”は、もっと大きな背景からきており、グローバル化と資本主義経済社会における即物的思考（全体を見ないことを全体化する）や、マニピレーションと搾取の構造に向き合わざるをえなくなった。

これらの問題は、一部の富裕層がその他の人間を搾取・消費するという世界的構造の縮図であり、非常にスケールの大きなテーマであるが、それらに直接的にアプローチするのではなく、スラムの問題に向き合うことで、ここまでのスケールの問題にアプローチできる可能性を示唆していると前向きに捉え、作品発表を最も身近なIKJの若者にレクチャーパフォーマンスを行なうという新しい視点をあたえてくれた。



5、スラムにおける母親

スラムにおける母親は様々に引き起こされ結果としてのた事を最終的に受け止めることになる存在であり、最も虐げられているという見方も出来る反面、ここへのアプローチによる向上は未来への希望にもなりうる存在であるともいえる。

仕事を得られない男性が多いスラムでの生活は彼女たちに支えられているといっても過言ではなく、現実と向き合わざるを得ない彼女たちには、ある種の強さと諦めが同居していた。

実際に、今回のリサーチでも印象にのこった人々の多くは女性であった。

なによりも、彼女たちのどんな状況下でも気丈に笑ってみせる姿は、言葉にできない印象的な経験であった。



6、教育の意味

“教育” に対してのリサーチを行なって行くうちに、本質的な“教育” とはなんなのかということを考えさせられた。

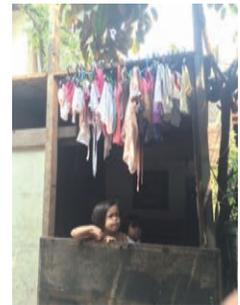
最初は政府や NGO の一義的なサポートは、支援する側の問題を想像させたが、支援を受ける側の、「サポートを当然のものとして」待っているしたたかさや慣れに気づくと、受け身であり、自分で考えたり、行動を起こしたりしないという支援される側に根源的な問題として存在していることに思い至る。

このことから、1人1人が考える力を養うことが共通の解決方法であると感じる中、それでは訪れた各国で何が違ったのかと振り返ってみると、彼らを“利用する側”の姿勢や状況が違うだけであったのだろうと気づかされた。

それでは、日本はどうだろうか？

我々は1人1人が考える力を養えているのだろうか？そして、それぞれの幸せに向きあって、選択をできているのだろうか？

当初の問いである“スラムでの生活の中にある我々先進諸国の失ってしまった何かに改めて向き合う”という点において、これらのスラムでおこっている問題は、翻って全くもって私たちへの問いそのものであった。



7. 成果発表について

以上のことをふまえ、最終的に、ジャカルタの芸術大学 IKJ にてワークショップとレクチャーパフォーマンスという形で作品の上演を行なった。

まず WS では照明 WS として開催されたが、内容としては、コミュニケーションと自分で考える力をつけるべく、コンセプトや作品への考え方を中心とした思考の強化をはかる WS を行なった。レクチャーパフォーマンスでは、Yola の左にある1枚の写真に対する問いかけから始まり、このリサーチから立ち上げられた約20分間のパフォーマンス。そして後半は筆谷のスラムに対する他者としての、虚のアンサーをプレゼンテーションし、観客の違和感からカウンター的に自分の考えに向き合ってもらおうような試みを行なった。

そしてその後、1時間以上に及ぶ Q&A、フィードバックを設け、今回のフェローの成果発表とした。



When I took this picture of this little boy, I was wondering what was on his mind. Then I said to myself, oh maybe he was talking to God, "Dear God, why don't you let me choose where I want to be born?" And once again I thought to myself, "If God let him choose the place he wants to be born, where would he choose?"



8. フェローシップ活動を終えて

これらのリサーチを終えて、今回向き合うことになった問題の構図は、“都市におけるスラム”というのが単に縮図であり、本質的には、世界の中で“少数の富める者”と、“資本主義経済において搾取されている国”という関係性そのものを象徴していることに気づかされた。

しかし、同時に、“それでは彼らは不幸なのか”という問いに対しての答えは別の次元であり、個々人の感じる幸せは身近な日常から生まれ、他者によって決められるものではないということも1つの本質であった。

上記のマクロとミクロの視点を同時に実感できたことは、なにより大きな収穫であり、だからこそ、1人1人がそれぞれの世界に向き合い、自分で考える力を育むことこそに意味があると改めて確信した。

以上の経験から、舞台芸術の根源的な可能性を信じ、今後もいっそう多くの国の人々に観劇を含んだ“経験”に参加してもらえる活動を展開していく。

具体的には、このリサーチの集大成をフレームとして作品化し、各国で現地の出演者を採用しながらツアーをできるよう Yola とともに、さらなるクリエイションを進めて行く予定である。

